

取材・編集・制作「川上隆志ゼミ生」

雑誌『SHOW』誕生

学生達の好奇心“満載”

「のぞき見 出版界」、サブカル、極め付きの対談も

文学部・川上隆志ゼミ生による雑誌『SHOW』(A4判80ページ)が誕生した。構想から発行までほぼ1年がかり。好奇心旺盛な学生の視点で切り込んだ創刊号をのぞいてみよう。

川上教授は、出版大手の岩波書店から昨年4月、大学教員に転身。岩波時代は新書、書籍編集者として活躍する一方、“アカデミック岩波”路線とは一味違う文化総合雑誌『へるめす』の編集長も務めた。そんな指導教員を得て、ゼミ第一期生14人(現3年次生)が取り組んだのが『SHOW』創刊号。企画から取材、撮影、制作(編集・レイアウト)まですべてを学生だけでこなした力作だ。

中身は硬軟織り交ぜ、実に盛りだくさん。「のぞき見 出版界」「いつもあなたの側にあるサブカル」「カレッジスポーツに己を懸ける!」の特集3本とコラム3本にカラーグラビアがふんだん。

「プロスポーツに着目すると思った」と川上教授が意外性を指摘した「カレッジスポーツ」特集では、関東大学サッカー連盟幹事長や専大スポーツ編集長に話を聞いた。本学応援団直伝のエール振り付けをイラスト入りで紹介。一般学生の大学スポーツへの関心を高めようとしている。「サブカル」特集は、マンガ、ゲーム、ライトノベルを取り上げ、専大生のアンケート調査結果から人気の秘密をひもといた。

作家と元編集者の対談「小林恭二(文学部教授)×川上隆志」は5ページにわたって展開。「両先生とも包み隠さず話して下さった(小林加奈さん)と担当者が感激したこのスペシャル対談、マスコミ志望が多いメンバーが最も実現したかった企画だろう。作家・編集者両者の関係や『書く』ことへの情熱とは」「編集者の志とは」が存分に語られ、かつて両氏が手がけた思い出の一冊『俳句という遊び』の誕生秘話が披露されている。小川信一郎編集長が「一般読者にとっても面白い雑誌になったのでは」と言うのもなげける企画だ。

「出版特集」はほかに、書籍紹介雑誌『ダ・ヴィンチ』編集長インタビュー、再販問題やオンライン書店の現状など出版にまつわる話題が満載だ。

コラム「2006年重大ニュース」は、学生たちが内外の問題に“モノ申す”オピニオンページになった。韓国留学生のホン・セアさんは、安倍晋三首相が唱える「美しい国」作りには、「日本がアジア諸国からの信頼を高めることが先決」と辛口メッセージを送っている。

全員が初めての雑誌作り。反省点も多い。「締め切りを守る。誤植を出さない」という“基本”の徹底を呼びかける声と共に「『イン・デザイン』ソフトを使った編集技術をもっと向上させたい(関根香織さん)との声が多くあった。

川上教授は「ゼロからスタートし、完成にこぎつけた1年間の成長は驚き。いつでもプロになれる」とゼミ生の努力を称え、「雑誌作りにより、日本文学・日本文化をトータルで勉強できたのでは」と、後輩2年次生6人



▲『SHOW』創刊号。書名は「専修大学」のSと「どのようにして」のHOWを組み合わせ、「見せる」=『SHOW』に



▲3年次生が2年次生に編集ソフト「InDesign(イン・デザイン)」の使い方をアドバイス



▲「苦勞したけど喜びはひとしお」—川上教授と創刊号を手にする“ゼミ生編集者”

と共に取り組む「第2号」(竹内里栄編集長)にさらなる期待を寄せる。

『SHOW』創刊号は希望者に実費で頒布。生田キャンパス10626研究室へ。問い合わせは
LJ172056@isc.senshu-u.ac.jp 小川信一郎さんまで。

日本語教育能力検定試験に合格『専大キャンパスことば辞典』も編集集中

授業の積み重ねがすべて「力」に

— 真島綾子さん(文4)

文学部4年次の真島綾子さんが、06年度の日本語教育能力検定試験に合格した。「社会・文化・地域」「言語と社会」「言語と教育」といった幅広い分野から出題されるこの試験の合格率は平均約17パーセント。指導にあたった王伸子商学部教授は、「社会人や教員でも合格は難しい。講義を常に最前列で聞く、真島さんの努力の成果」と称えている。



▲楽しい雰囲気が自慢の王ゼミ。前列左から3人目が真島さん。隣は王教授

「言葉遣い」に厳しかった高校時代の部活の経験から「言葉」に興味を持ち、日本語日文学科日本語学専攻に入学。永瀬治郎教授や林義雄教授の講義で、「日常使っている『日本語』のことを知らない自分」に愕然としたという。2年次の「音声学」の講義で王教授と出会い、日本語教育学を学ぶ教養ゼミに入った。

日本語教育にかかわるさまざまな周辺領域を学ぶ王ゼミの半数は留学生。ゼミそのものが「異文化コミュニケーション」の場であり、王教授も留学生から刺激を受けることも多いという。

「日本語の勉強をするなら目標を持つ」と試験勉強を始めた真島さんの強力な味方が、1年次からとってきた「ノート」だった。「後から読み返しても分かるように、自分なりに工夫してきました。学んできたことに少し付け足すことで、試験範囲のほとんどをカバーすることができたのです」。入学時からの努力と集中した学習で、見事目標を達成した。

将来は「外国人の生徒に、教科だけでなく『日本語を教える』ことができる教員になりたい」と夢を膨らませる。

現在は、同じ王ゼミの藤井千栄子さんと、永瀬教授の指導で、『専修大学キャンパスことば辞典第7集』を編集集中。専大生の間で使われてきた「ノボル(登る)」「サンシタ(3号館下食堂)」に加え、「クナイチョウ(971号教室)」「カイガイグミ(休学して留学した学生)」といった新しい言葉も加わり、楽しめる辞典になりそうだという。

高校教員対象研修プログラム

文学部では昨年、好評を得た高校教員を対象とした研修プログラムを今夏も生田キャンパスで開催します。詳細は文学部ホームページをご覧ください。

※申込締切は6/15(金)消印有効。応募多数の場合は、抽選とさせていただきます。

▽教科・定員・日程＝英語(定員30人)、地理(同20人)、現代社会(同20人)＝7/30、国語(同30人)＝7/31、倫理(同20人)、世界史(同50人)＝8/1、日本史(同50人)＝8/2

一級の市民ランナー

山田大輔さん(経済4)

「四万十ウルトラマラソン」100キロマラソン29歳以下で優勝

「走ることが僕の生きがい」と言い切る経済学部国際経済学科4年次の山田大輔さんは、市民ランナーとして大活躍。今年に入って五輪代表選考会にもなっている「別府大分毎日マラソン」や「東京・荒川市民マラソン」に出場。「荒川」では2時間42分15秒のタイムで一般の部6位に入賞する好成績を収めた。

中学までは水泳選手だったが、「人が入り込めない世界に挑戦しよう」と専大附属高時代、マラソンに飛び込んだ。気がつけば「走ることが生活そのものになってしまった」と言う。練習メニューは独自で組み立てて、毎日30キロのランニングに加え、生田総合体育館での水泳、筋力トレーニングもみっちり行っている。

大会出場は年間5、6回のペースで。一昨年からは100キロマラソンにも挑戦。昨秋の「四万十川ウルトラマラソン」では、8時間21分23秒を出し、「29歳以下」で見事優勝を果たした。

勉学もおろそかにはしない。2年次に学術奨学金を取得、3年次には飯沼健子ゼミのゼミ長を務めた。今、ゼミ仲間とマラソンを生かした国際協カイベントを計画中だ。

「世代を超えた人間関係が育まれるのがマラソン。たくさんの人々に支えられ、走ることによって得たものの大きさは、言葉で言い表せないほど」と笑顔で語る。

「夢？ オリンピック出場です。11月の『つくばマラソン』で2時間30分を切り、代表選考会となる『東京マラソン2008』出場を目指します。“北京”がダメでもその次は……。100キロマラソンの世界大会も目指しますよ」

鉄人「ダイスケ」の挑戦は続く――。